

大学教員志望の大学院生が習得すべきこと

大学教員志望の大学院生にとって教育能力の習得は必要か否か。みなさんはどのようにお考えでしょうか。

然視されてもきました。ただ、

18歳人口の半数以上が大学・短大に進学する現在、学生の知識や学習意欲は多様になっており、

教員の側にもそれに対応した指導力が求められるようになっていきます。就職するなり、教育の

即戦力としての活躍が期待される状況があります。近年、教員採用の面接時に模擬授業を求め

る大学が増えていますが、このような事情と無関係ではありません。

とすれば、将来の職業として大学教員を予定している人は、就職後に教員として従事する仕

事がどのようなものかを前もって知っておく必要があります。

とくに中核となる教育に関する仕事について、正確な知識と遂行能力を得ておくことが重要です。

は、就職後10年くらいをかけてゆっくり教育能力を形成していった。それが可能でしたし当

をいまだにもっている人がいま

す。誤解を招くようなことを書いている大学教員もいます。そ

のような誤解の数々を払拭することは、本人のためにも雇用する大学にとっても必要なこと

です。このような事情をふまえて、今春、高等教育研究センターで

は『大学教員準備講座』と題する書籍を玉川大学出版部から

公刊しました。大学教員として求められる職務を一通り理解

してもらおうという趣旨に沿って、授業や学生支援の進め方

を中心に、研究活動、学内業務、社会サービスなど多岐にわたる内容を取り上げて

います。この書籍は、本センターが2005年

から開催してきた「大学教員準備プログラム」の教材をもとに書きあげたものです。じつは名古屋大学は、このようなプログラム開催の日本の先駆的存在として注目を集めてきました。

さらに新年度からは、教育発達科学研究科の正規授業の一つとして開講する運びになりました。今年8月の集中講義には、研究科を問わず多くの大学院生に受講して欲しいと願っています。大学教員志望の大学院生に適切な知識とスキル向上の機会を提供できるよう、教職員の皆さんのお力添えをいただきながら進んでいきたいと考えています。(夏目達也)

大学教員準備講座

夏目達也 近田政博
中井俊樹 嘉藤芳子

大学教員という仕事

大学教員になる前に知っておきたいこと、習得しておきたい技能を詳説
玉川大学出版部 2010年4月24日発行(162頁)

『大学教員準備講座』目次

- 1章 大学教員という職業
- 2章 授業を設計する
- 3章 教授法の基礎
- 4章 学習成果を評価する
- 5章 書く力をつけさせる
- 6章 学生のキャリア形成を支援する
- 7章 大学教育におけるチームワーク
- 8章 研究のマネジメント
- 9章 社会サービスに取り組む
- 10章 国際化のなかの大学教員
- 11章 大学教員の倫理
- 12章 多様な高等教育機関
- 13章 大学教員のライフコース
- 14章 大学教員への第一歩

大学教育改革フォーラム in 東海 2010 を開催

2010年3月13日(日) 10:00-17:50 於IB電子情報館



ポスターセッションの様子



パネル討論の様子

2009年度名古屋大学学生論文コンテスト

「学問のススメ 論文へススメ」

選考結果
発表!!

優秀賞(附属図書館長賞)

「携帯のブログが若者の人間関係に与える効果」

工学部1年・築山ちえ美さん

優秀賞(三省堂名古屋テルミナ店賞)

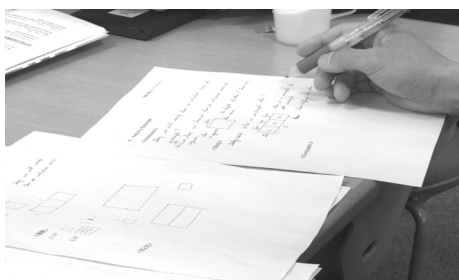
「日本の少子化問題 ～今後の向き合い方について～」

経済学部1年・山口真平さん

受賞論文は名古屋大学学術機関リポジトリよりご覧になれます。

教員のためのワークショップ「英語で教える」を開催しました

2010年2月4日(木) 13:00~17:00
於CALEフォーラム



授業案作成に取り組む



講義を始める堀江講師

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメール
アドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

教員メンター制度 Faculty Mentor Program

日本の大学ではあまり見られないファカルティ・ディベロップメントの形態として、教員メンター制度があります。大学において豊かな職務経験をもつ教員が新任教員のメンターとなり、新任教員が大学教員として成長していくことを支援する制度です。赴任間もない新任教員にとって、メンター教員との交流は、個別大学の文化を知り、そのコミュニティの成員となるための貴重な経験だと考えられています。

メンター制度は、新任教員にメンター教員を紹介して「後は2人でよろしく」というものではありません。教員メンター制度が有効なものとなるよう、多くの大学が活動のガイドラインを定めています。たとえば、初回のミーティングでは、メンター教員と新任教員の間で活動の進め方について合意書を作成することが求められます。メンター活動の目的、ミーティングの場所と頻度、相互の授業見学をするかどうか、活動の過程で得られた個人情報の取り扱い、活動の報告の方法などを相互で確認しながら決めていくのです。

ミーティングにおいて、メンター教員は、自大学の特徴、学生の特徴、参加できる研修機会、参考となる書籍などについて話すことが奨励されています。状況に応じて新任教員に紹介できるよう、図書館、学生サービス部門、教育支援部門、研究支援部門といった学内のさまざまな組織について理解しておくことも必要です。早い段階に2人でキャンパスツアーを実施するという方法もあります。一方、メンター教員が自身の教育観や研究観を新任教員に押しつけることは、プライベートに立ち入ることと同様に、避けるべきであるとされています。

教員メンター制度は、新任教員のみでなくメンター教員にとっても意味があります。メンター教員は新任教員と意見交換することに意義を感じていること、また自らの教育研究を振り返り今後のキャリアを考えるきっかけとなることが調査で明らかになっています。

(中井俊樹)

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『これから研究を書く人のためのガイドブック』

佐渡島紗織・吉野亜矢子 著 ひつじ書房 (2008年)

学生に文章を書かせることに苦労している教員は少なくない。書けない理由はいろいろあるだろう。私なりに考えるに、最も大きな理由は、どういう文章が大学における望ましい文章なのかを最初にきちんと学生に教えていないことではないだろうか。

そういう教員の側も、アカデミックな文章の書き方を体系的に学んだという人は少ないかもしれない。今

日の大学教員のしんどさは、自分がかつて学生だった頃のような「学生は自分で学べ」という論理が通用しなくなっているところにある。多くの教員は、大学院生への論文指導に手一杯で、学部生のレポートや卒論指導までは十分に手が回らない。でも、基本的なことを最初にきちんと教えていないと、卒論や修論の際に「てにをは」の面倒までみなければならない羽目になる。

ああ、どうしたらいいんだろう。

この『これから研究を書く人のためのガイドブック』という本、タイトルは少し不思議なのだが、低年次生向けに日本語を書くトレーニングをさせるのに適切な入門書である。早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラムの標準テキストとして作成されたという。

今の時代、人様に読んでもらえる日本語を書ける若者は、それだけで立派なものだ。正直言って、名大生もこの点でかなり怪しい。学生が的確な日本語を書けるように鍛えるシステムを早く構築しないと、個々の教員がパンクしてしまうかも。

(近田政博)

高等教育研究センタースタッフ (2010年4月現在)

センター長	木俣元一
	専門領域：西洋中世美術史
教授	夏目達也
	専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博
	専門領域：比較高等教育学、学習支援
准教授	中井俊樹
	専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子
	専門領域：科学技術社会論

<平成22年度 海外客員>	
陳 向明	(中国・北京大学)
キャサリン・マナトゥンガ	(オーストラリア・クイーンズランド大学)

<平成22年度 国内客員>	
羽田貴史	(東北大学)
飯吉弘子	(大阪市立大学)
福留東土	(広島大学)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市中種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/

「独学」というアプローチ——教えられないことを学ぶ

学びの基本は独学という形にあると私は考えています。私は大学という教育機関で教職に就き、高等教育の組織的な改善をめざす場に身を置いています。あえてこのことに目を向けてみたいと思います。

何かを学ぶための形には、さまざまなものがあります。大学をはじめ公式の組織に所属して授業を受ける以外にも、仲間で勉強会を開いたり、一人で本を読んだりすることもできるので。集団の中で学ぶより、自分のペースで学習を進める方が性に合っているという人もいます。

ずです (実は私もその一人です)。

ところで一般に独学というと、組織的な教育のシステムから外れたものを指しているようです。しかし逆に、独学という基本形態の上に、大学などの組織的教育がかぶさっているという見方もできるように思えます。というのは、結局のところ、学ぶという行為はそれぞれの個人においてしか発動しないからです。この行為は、何かを学びたいという強い欲求や関心が出発点になっています。もちろん、大学での教育も本来は同様なので

ですが、小中学校から高校、大学、大学院というコースの上を走っていると、どうしても、そうした動機づけが見えにくくなってしまふような気がします。

独学をする者は、学ぶプロセス全体を自己管理する術を自然と身につけます。大学院への進学や留学をしたり、社会に出たり、あるいは研究者となったりしたときには、このことがとても大事になってきます。彼らの大きな強みは、失敗を重ねながらも、自分で工夫しながら学び取るうとする力にあると思います。というのも、教育

の手法をどのように改善しているかも、最後どうしても教えられないもの、すなわち学ぶ者がジャンプして自らつかみ取るしかないものが残るのではないかと思うからです。

とくに研究の世界では、誰も教えてくれない、これまで一人も考えたことのない未知の領域に入っていかなければなりません。その時、自分でつかみ取るうとする気持や力が、大きな意味を持つてくるのではないのでしょうか。こうした個々の学びの姿勢と大学という組織を上手につなげることができたら。そんなことを考えています。(木俣元一)